2021 年 5 月30日 久宝教会 聖霊降臨節第 2 主日（三位一体主日）礼拝

メッセージ「その軛は無理がなく、その荷は軽い」　　牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 11 章 25−30 節

今月末までと言われて大阪府に出されていた「緊急事態宣言」は、やはり来月 20 日までに延長されることになりました。日々の新型コロナの感染者数は、減って来ているようにも見えますが、昨年と比べると圧倒的に多く、雲泥の差です。そのような中、ワクチンの接種が少しずつ行われているとはいえ、その効果が目に見える形として現れて来るのは、まだまだ先のようです。

全世界では、既に 1 億 7000 万人が感染し、353 万人が亡くなったと言われていますが、実際にはそのような統計に数えられていない人たちも多くいるようで、WHO（国際保健機構）では、その 2 倍から 3 倍の人がコロナで亡くなっているのではないかと考えられています。そのような現実を評して、国連の事務総長は「世界は新型コロナウイルス感染症との『戦時中の状態にある』」と言っていました。その他にも、ようやく停戦したとはいえ、イスラエルのパレスチナ爆撃では、双方の間に多くの民間人を含む何百人の死傷者が出たと報じられています。ミャンマーでは、2 月のクーデター以降、国軍によって、反対する市民 800 人以上が殺害され、4000 人以上が今もなお拘束されているとのことです。

そのような国内外の情勢の中、未だに昨年から延期された東京オリンピックの開催に向けての動きは止まっていません。世論は既にずっと前から、中止を求める声が大半であるにも関わらず、国際オリンピック委員会（IOC）の幹部は、「緊急事態宣言が出されていても、絶対に開催する」「オリンピックのためには、犠牲も払わなくてはならない」などと言って憚（はばか）りません。もはや世界の「平和の祭典」どころか、利権を手にする極一部の人々のためのお祭りであることを、隠す気すら無くなっているようです。開催国の人々の意向や、感染リスクなどは無視され、むしろ大多数の人々はその大会のために利用され、搾取される……。狂っているとしか言いようがない状況が今もなお続いています。こんな狂った現実の中で、聖書は私たちに何を語っているのでしょうか。

今回の聖書の言葉は、有名な言葉ですので、どこかでお聞きになったことのある方も、おられるかと思います。よく教会の看板や、案内チラシにも書かれている言葉です。

> 28 すべて重荷を負って苦労している者は、私のもとに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう。29 私は柔和で心のへりくだった者だから、私の軛(くびき)を負い、私に学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に安らぎが得られる。30 私の軛(くびき)は負いやすく、私の荷は軽いからである。

イエス様のこの言葉は、一体何を言っているのでしょうか。「28 すべて重荷を負って苦労している者は」とは、イエス様の目の前にいた人たち、社会の底辺に置かれ、その日の糧を得るための労働に就いていた人たち、そしてまた様々な障がいや病気などのために差別され、社会から排除されていた人たちでした。その人たちに対して「29 私の軛(くびき)を負いなさい」とは、どういうことでしょうか。

「軛(くびき)」とは、その言葉の通り「頸に架ける木」ですが、牛やロバに車を牽(ひ)かせたり、畑を耕させる鋤(すき)を牽(ひ)かせたりするときに、その頸(くび)に架ける農機具です。牛やロバにしてみたら、それらは重荷でしかありません。にも拘(かかわ)らず、イエス様は「疲れ果てた人は私の所に来なさい。あなたたちの軛(くびき)を外してあげましょう。私は優しいですからね」とは、言われませんでした。何故でしょうか。30 節にある「私の軛(くびき)は負いやすく」という言葉は、私の軛(くびき)は「楽である」「心地好い」の他にも、「適した」とも訳せる言葉です。例えば、自分の足のサイズと靴のサイズがぴったりと合っていたら、無理がなく楽で心地好いように、軛(くびき)が自分の肩や首の形にぴったりとフィットしている状態を表わしています。

小学生になったばかりの子どもが、自分の背中よりも大きなランドセルを背負うのは、とても大変そうに見えますが、肩や背中にぴったりとフィットしていれば、無理なく背負えているのではないかと思います。またキャンプや登山に行く時にも、大きな荷物を背負いますが、手では長時間抱(かか)えていられないような大荷物でも、自分の背中や肩に合ったザックや背負子(しょいこ)を使えば、無理なく背負うことが出来ます。同じように「私の軛(くびき)は無理がなく、その荷は軽い」とは、一見とても無理そうに見える重荷でも、実際に背負ってみたら、意外と軽かった。自分の肩にフィットしている背負子(しょいこ)、軛(くびき)を使ったら、やってみて出来ないことは無かった、ということなのではな

いかと思います。

私たちの日々の生活の中から、軛(くびき)、重荷は無くなりません。それらが「一切無くなりました」と言ったら、それはきっと嘘になると思います。私たちは時に、躓(つまづ)き、しんどくなって倒れしまうことがあります。そして「神様、何故、今、こんなに負いきれない重荷を与えられるのですか。私のこの小さな肩にはこの荷は重すぎます。どうか取り去って下さい」と、祈ることがあります。しかし、聖書は言います。「29 私の軛(くびき)をつけ、私を見習いなさい」……。

「軛(くびき)」と聞くと、私は牛が一頭で車を牽(ひ)いているような「一頭立て」の様子を想像しますが、古代イスラエル社会における「軛」は、二頭立てだったようです。ですから、「私の軛(くびき)を負いなさい。それはあなたに適している」という言葉には、「あなたの隣に、あなたと共に軛(くびき)を負う仲間・助け手も備えましょう」ということも含まれているとも考えられます。もちろん、私たちの隣に並んで立ってくれて、一緒に軛(くびき)を負い、重荷を担ってくれるのは、全身が光り輝く天使ではありません。あくまでも私たちと同じ人間です。しかし、そのような仲間たちの姿を通して、その仲間たちを備え、歩めるように道を整えて下さった神様を、私たちは知ることができるのではないでしょうか。

29 節には、イエス様がご自身のことを指して、「柔和(にゅうわ)で心のへりくだった者」と言われています。以前の新共同訳では「柔和で謙遜」と訳されていました。しかし、この言葉の元の意味や、他の箇所との比較などから、「私は抑圧にめげない者、心底身分の低い者」という訳もあります。「柔和」と聞くと、誰にでも優しく穏やかな様子を想像しますが、イエス様は人を抑圧し差別する悪には、断固として抵抗されました。それは心が謙遜でへりくだっていたからではなく、自分自身も社会の底辺に追いやられて、差別、排除され、抑圧されて来たからこその共感、共鳴だったのだろうと思います。自分もその苦労、重荷を知っている。だからこそ放っておけない。黙って見てられない。それがイエス様の原動力であり、イエス様に学ぶ者、見習ってその後について行く者の原動力なのでしょう。

一人ではしんどくて、とても登り切れない高い山でも、仲間たちと一緒ならばボチボチと歩みを進められるということがあります。勿論、途中で道に迷って右往左往したり、怪我をしたり、お腹を空かせることもあるかもしれません。それでも、ふと気

付くと山頂に立っていたということが、実際にあるのだと思います。また仕事はしんどくても、同僚たちと何だかんだと言いながら、ふと気付くと何とかやりきれていたこともあるのではないでしょうか。私たちの日々の些細(ささい)なことの中に、「軛(くびき)を共に負うこと」、そしてそこに共におられる神様の働きはあるのだと思います。

大人であれ子どもであれ、誰であっても、その人生の中には、辛く苦しい時期というものが、何度もあると思います。私も自分自身の限界を感じる時がありました。しかし、その度に、仲間や家族や、聖書の言葉など、様々なものに支えられ、励まされて乗り越えて来ることが出来ました。いえ、「乗り越えられた」などと格好良く言えることばかりではなく、散々な結果で失敗だったことも、後悔ばかりが残っていることもあります。それでも、何とかここまで生きて来られて、今があります。それらのことを、振り返ってみて思わされるのは、「あの時、もし自分一人だけだったら、自分は今、決してここにはいないだろう」ということです。私が、今ここに、こうしていられるのは、あの時、あの重荷を、誰かに一緒に負ってもらったから、誰かに軛(くびき)を共に負ってもらっていたからに他なりません。そしてそれは具体的には周りにいてくれた人たちでしたが、その人たちとの交わりの中に、神様は共にいて下さり、共に苦しみ、共に軛(くびき)を負って下さっていたのだと思います。

「私の軛(くびき)を負いなさい。その軛(くびき)は無理がなく、その荷は軽い」……。一部の人の利権のために、多くの命が軽んじられ、踏みにじられている、この狂った社会の中で、私たちは神様から命を与えられ、生かされています。イエス様は「私に見習いなさい」と言われています。私たちは自分の軛(くびき)を誰かに共に負ってもらいながら、又、自分も誰かの軛(くびき)を一緒に負っていきます。まだ行き先は遠く、ハッキリとは見えませんが、私たちは今日も神様と共にあって、一歩ずつ歩んで行きます。